

最優秀賞

本当の強さを求めて

学校法人済美学園 済美高等学校 1年

井上 みち

「またやってしまった」と思ったのと同時に相手の方に旗が三本上がった。剣道の団体での代表戦。代表で出た私は、今まで何度もしてきた失敗で、またチームのみんなを泣かせてしまった。小さい頃から続けてきた剣道の小学生の時の試合である。理由は分かっている。どのスポーツでもメンタルが弱いと最高の力を出すことはできない。私の場合、勝つことを意識して足が止まってしまう。遠くから打ちにいくので竹刀が相手に届かない。負けるのが怖い自分が、何度も大切な場面で出てきてしまうのだ。「自分に克つために声を出せ。」よく先生方に言われた。小学生の頃は声を出すのが精一杯だった。基本を積み重ね、声を思い切り出して、どのような場面でも弱い自分が出ないように稽古を繰り返した。

そんな私の考え方を変えたのは、腕試しと思って全国から集まる大会の個人戦に出場した時。強い相手ばかりなので、すぐに負けることも覚悟で遠くまで出かけた。一回戦の相手は私よりも年下の中学一

年生だったけれど強かった。今回は勝ちを意識していなかったからなのか、勝てた。面を外して座っていると、大勢の中、その相手が初めて会った私を探してきて、悔しいはずなのに「ありがとうございました。」と座って笑顔で、対戦したことのお礼を言ってくれた。その瞬間、私は負けた。強くなるために一生懸命に声を出してきたのに、そのたった一言の誠意が今までで一番の強烈な一本だった。相手の心の強さに気が付いた。声を出せば強くなるのではない。「ありがとう」に限らず、誠実に相手と向き合った時の心からの一言が本当の強さなのだと思うようになった。

これからは竹刀を構えた時、誠実な心の言葉で向き合おうと思う。たとえ「ヤァー」でも、それが相手への敬意になる。勝つためだけではない、確実な一本を取るために、負けることから始まった私の人間形成の道は心の言葉と共にまだまだ続く。